

家族システム援助論(9)

—オートポイエーシス理論からみた家族システムの諸相—

十 島 雍 蔵

(1998年10月15日 受理)

Theorizing for Helping Family System (9)

—Some Phases of Family System from the viewpoint of Autopoiesis Theory—

Yasuzo TOSHIMA

はじめに

家族の家族性（普遍性と多様性） 家族と面接していると、じつに様々な家族に出会う。亭主関白の家族もあればカカア天下の家族もある。絡み合い家族もあればバラバラ家族もある。人が同じ人間でありながら一人ひとり違った独自の存在であるように、家族もまたそれを家族と言わしめる普遍性を備えながら、多様性と個性をもっている。家族を理解するためには、本質のもつ普遍性と眼前にある現実の現象の多様性を同時に把握しなければならない。家族に対する基本的な問いの一つは、この家族がなぜこの家族であり、あの家族がなぜあの家族なのかということである。臨床場面ではことに普遍性に止まらない個々の家族のアイデンティティへの問い掛けが重要である。

中村桂子氏は言う。「生命に関する科学の基本的問いである、普遍であり多様、多様であり普遍という性質を内在させているシステムが自己創出系である」¹⁾と。氏によれば、自己創出系としての生命は、普遍と多様の二つをつなぎ、更には分析・還元と総合・全体、変と不変などをつなぎ、このまったく相容れないように見える二つの価値を結び付ける可能性をもっている。自己創出系としての生命の最大の特徴はやはり一にして多、すなわち統一性と多様性をみごとに同居させていることだ、という。

家族をその家族たらしめていることを「家族の家族性」というならば、それは普遍性と多様性の両面をともに備えている。ある仕組み（コード）に従って継続的に「家族の家族性」を創出しつづける自律的な働き方（モード）そのものがオートポイエーティックな家族システムである²⁾。ここで、コードとは家族の普遍性を産み出すシステムの仕組みのことをいい、家族の多様性をもたらしシステムの作動様式をモードという。その働き方（モード）が異なれば、家族のあり方も異なる。家族性によって家族のアイデンティティが維持されると同時に、その家族性そのものが時間の経過

とともに自然に変化する。いわゆる家族の発達である。複雑に見える「家族の家族性」は一組の小規則にしたがって働く家族員の相互作用が機縁となって産み出されたものである。

社会システムとしての家族 非公式的な家族内コミュニケーションにおいては、誰かが何かを発言すると、それを受けて他の誰かが応答し、さらに別の誰かが口を挟むといったぐあいに、家族内で次々に発話が引き継がれる。この発話の継続にもおのずからある構造が醸し出されるが、その構造それ自体が発話の継続とともに自然に切り換わる。公式的なコミュニケーションのように構造が先にあって、それに応じた発言がなされるのではない。このようなコミュニケーションの流れをイメージするとき、そこにオートポイエーシス・システムが出現する。構成素としてコミュニケーションを連続的に産出するシステムを社会的システムという。コミュニケーションが途絶えれば、たとえ家族員がそこに存在していたとしても、オートポイエーシスは跡形もなく消滅する。そこに残った家族員の集合はオートポイエーシス・システムではない。オートポイエーシスは相互作用の継続が基本であって、単なる“もの”の集合ではないのである。したがって、いったん消滅したオートポイエーシスも、機縁を得て家族内にコミュニケーションの継続が再開されるならば、再びオートポイエーシスとして蘇る。オートポイエーシスは、コミュニケーションの継続的な産出的作動そのものによってシステムの境界を定めるから、コミュニケーションの継続に参加しなかった家族員はシステムの外部へ区分される。

筆者は、これまで第三世代のシステム論と呼ばれるオートポイエーシス理論の視点に立って、家族心理学、あるいは家族療法を統一的に理解しようとする研究に従事してきた^{3),4),5)}。本論文もその流れの一環に属する断章で、主として、家族ルール、境界、時間の概念に焦点をあててささやかな論考を試みる。

なお、オートポイエーシス理論については、我が国におけるこの分野の第一人者である河本英夫氏^{6),7)}に依っていることをはじめにおことわりし、謝意を表しておく。

Ⅰ. 家族ルールとオートポイエーシス

家族ルールとは 家族システムには、その家族に固有な文化に根差したルールが厳然として存在する。家族はこのルールによって構造化されているシステムである、ということが出来る⁸⁾。意識的であれ無意識的であれ、親も子どもも、家族員の行動はすべてこの家族ルールに縛られている。家族ルールは、ジャクソン⁹⁾によって最初に指摘された概念で、家族療法事典¹⁰⁾によれば、「一定の家族機能の繰り返しをつくり出す共有された規範や価値観のメカニズム」をいう。平たく言えば、家族員が、その時その場の状況に応じ、相互の関係の中で、誰が、何を、いつどこで、どのように

行うかについての約束ごとである。佐藤悦子氏¹¹⁾の説明を借用する。ルールは行動の規範として「～してはいけない」（子どもは親に口答えしてはならない）、あるいは「～すべきである」（妻は夫に服従すべきである）という形をとり、行動のあらゆる面に及んでいる。家族内コミュニケーションや家族員間の相互作用は、家族ルールに支配されてパターン化されており、それが家族の構造を決定する。繰り返し起こるコミュニケーション・パターンと家族ルールは密接不可分の関係にあるのである。むしろ、ルール違反の行動が起こることもしばしばあるが、その場合、違反者には何らかの負のフィードバックがかかって、家族システムはホメオスタシスを維持する傾向がある。

家族ルールは家族の話し合いによって明確化されたものもあるが、おおくは暗々裡に形成され、作用している。しかもルールには、高次のメタ・ルール、つまり「ルールについてのルール」、たとえば「ルールがあることに気づいてはならないというルール」があって、家族ルールはますます家族員に意識されにくいものになっている¹¹⁾。

平泉悦郎氏¹²⁾は、不登校児のいる家族の興味ある隠されたルールの例を報告している。夫婦に兄妹の四人家族。兄がIP。この家族は、父親と長男との間に緊張が高まると、母親がほほ笑み、妹がはしゃいで、二者間の緊張を中和させ、その結果、父親が浮いてパワーが低下する、という相互作用パターンを繰り返している。むしろ、このパターンは隠されたルールに支配されており、家族にも気づかれていない。それぞれの家族員はただ無意識裏に直前の状況に反応して行動しているだけである。一般に、家族システムの内部で行動している家族員には、自分の行動を縛っているルールを知ることはできないし、言葉で明確に定式化することもできない。ただ家族を外から注意深く観察しているセラピストに見て取れるに過ぎない。佐藤悦子氏は言っている。「(家族にとって)このルールは肉眼で見ることにはできない。なぜならルールは、(セラピストにとって)家族の相互作用を観察するために生成される仮説的構成体だからである。」()は筆者。家族ルールは、あたかも内在的な不文律のように機能しており、それが外在化されるとかえって混乱してしまう。そこで問題の家族ルールを変更させるために、ミラノ派の家族療法ではルールを家族儀式として実行するように処方することがある¹⁰⁾。

しかも、「父親と長男との間の緊張が高まることは、家族にとってデリケートな問題である。家族は和気あいあいではなければならない」というルールは最初からこの家族にあったわけではない。互いに異なる原家族の文化（生活様式）を身につけて育った二人が、結婚を契機の一つ家族を形成し生活を共にするようになる。最初、互いに右往左往しながらどう相手に合わせるかさぐりを入れ合う。新婚時代は、それぞれの生活場面でどちらの家族文化を優先させるかのパワー・ゲームで、さまざまな文化摩擦が起こる。家族内の異文化交流である。夫婦間の二者関係の相互交流の中からやがて一つの新しい家族文化（互いの行動を規制するルールやそれにもとづく構造）が生まれる。家計を支えるのは誰か、家事の分担をどうするか、互いの振る舞い方、どちらが支配権を握るか、などのルールがしだいに決まる。それなりにルールが定まると、家族構造が安定する。だが、子どもが誕生して三者関係になると、そのままのルールでは通用しなくなる。家族生活の中で育児の役

割分担がおおきな部分を占めるようになる。やがて子どもは思春期を迎え親は思秋期に入り、家族は多くの問題を抱える。それを何とか切り抜けても、子どもは自立し、再び老夫婦だけの二人っきりの生活に戻る。家族は、昆虫のように変態を繰り返しながら、発達し、それぞれのライフ・ステージにおいて適切な家族ルールをそのつど作り上げなければならない。

このように、一般に、家族ルールは家族が形成される前からあらかじめ存在しているものではなく、家族生活を営むプロセスの中で自然に醸し出されてくるものである。“はじめに生活ありき”である。家族システムは、家を建てる場合の設計図や演劇の脚本のように、事細かに描き尽くされたものを実現するように働くのではなく、まずその時その場の状況に応じた行為を生活として営む過程で、“歩ゆめば、そこに道”といったぐあいに、その家族の歴史性が生まれてくる。家族生活が営まれる位相空間やその家族固有の時間は家族生活の継続から自然に張り出されてくる。

しかし、いったん家族ルールが形成され、家族に安定的に定着すると、家族生活のあり様（モード）を強固に支配するようになり、家族員の行動やコミュニケーションが無意識の内にそれに規制される。換言すると、家族システムは家族生活という作動を営みながら家族ルールを生み出すとともに、その家族ルールに従いながら、非決定論的に家族ゲームを展開する。そこに上述の家族の家族性が生み出される。これが過度に固定化され、柔軟性が失われると家族に問題が生じる。こうした家族は「家族構造が硬直化」した状態に陥って、隠されたルールにがんじがらめに拘束され動きが取れなくなっている。

- ①家族システム内で行動している家族員には、ルールが見えないこと、
- ②ルールは家族システムを外から観察した場合のみ顕現化しうること、
- ③ルールは家族システムの形成以前にはじめから存在しているのではなく、家族生活の営みをつうじて生成されるものであること、

以上のことは、オートポイエーシスの作動のコード化とまったく同じであり、家族ルールの側面から家族システムをオートポイエーシス・システムとみなすゆえんの根拠の一つがここにある。そこでこの点に関するオートポイエーシス理論を概観しておこう。

設計図のないコード化 オートポイエーシス・システムは、構成素が構成素を産出するという産出プロセスのネットワークのことであり、みずから連続的に作動を反復しそれによって自己を創出しつづける機構である。したがって、このシステムは、“はじめに作動ありき”で、作動に先立っては、ほとんど何も決定されていない。作動を継続しながら自己の在り方を決め、そのコード化を行っていかなければならないのである。コードというのは、システムの作動の規則、つまり生成プロセスの関係を定めたものであるが、オートポイエーシスのコード設定は、言語の文法コードや遺伝子の情報コードのようにシステムの外部から捉えられたものではなく、みずからの作動によって定められる。

河本英夫氏⁷⁾によれば、複雑系としてのゲームの一般的特徴は、初期条件が決まって結果が定ま

らないところにある。結果が決まっていないからこそゲームが成立する。ところが、現実のシステムでは初期条件すら確定していない場合が多い。初期条件が確定していない中で、システムが動き続け、作動のモードを作り出してしまふプロセスが問題である。システムは連続的に作動しつづけているために、生成プロセスとは別にまず初期条件を設定して作動するような暇はない。いわばゲームの展開の中で初期条件が定まるのである。

システムの作動についての二種類のコード化の仕方は、よくマトゥラーナ¹³⁾が示した二種類の家の建て方の事例で説明される。職人集団の建築活動の継続をシステムとみなすならば、個々の職人の作業がそのシステムの構成素である。

建設システムの第一のコードは、設計図である。数人の職人で家を建てる場合、ふつう、完成された家の事細かな設計図とそれを実現するための綿密な工程表（プログラム）が予め与えられ、職人たちはこのコードに沿って仕事を進めていく。職人たちは、最初から最終結果が分かって建築している。ところが、ハチがハチの巣をつくる場合、あらかじめ寄り集まって巣の設計図をみて、役割分担を決めた上で巣をつくっているとは、まず考えられない。「ヒトの建築家と、巣造りに励むハチとの決定的な違いは、前者が設計図をひくことだ」と言われる。だが、果たしてそうだろうか。人間だってその生活の大部分は社会性昆虫と似たりよったりである。神ならぬ身、自分の人生設計のすべてを見通して生きている人など誰もいない。ただ、今ここに絶え間なく流れ込んでくる状況にただひたすら対応しているだけである。

一方、第二のコードには、そのような見取り図や設計図はなく、構成素の産出プロセスの関係だけがセットされている。つまり、職人たちには、ただ相互の位置や関係によって何をなすべきかについての指示だけが与えられる。この場合、家を完成させるためのコードの具体的内容は、システムの作動に先立っては何も決まっておらず、職人の行為を通じて定まる。出発点に配置された職人たちの位置や関係は建築のプロセスでさまざまに変化する。それでも同じように家はできる。しかも試行錯誤のあげく家まがいのものが出来上がるというのではなく、ただひたすら最短距離で家がつくられるのである。しかし、職人たち一人ひとりとは自分が何をつくっているのか知らないし、家が完成してもそれが自分がつくろうと思っていたものとは思わないであろう。芸術家の創作も同様で、作る行為を継続していくと産物はできるが、それが自分で作ろうとしたものかどうかは本人にとっても分らないものらしい。この第二のコードがオートポイエーシスのコードの例えである。

河本英夫氏⁶⁾は、このことをラグビーのフォーメーション・プレーの例で具体的に説明している。チームは、その時々状況に応じて自在に作戦を切り換えることができるように、さまざまなフォーメーション・プレーを反復練習し、個々の規則を習得している。プレーヤーには、それぞれのフォーメーションに応じて果たすべき役割が決められている。一つのフォーメーションのサインが出されると、各プレーヤーはいっせいにその役割を実行しはじめる。これは上述の第一のコードに相当する。

ところが実戦では作戦どおりにはことは運ばない。さらに練習を重ねてフォーメーションの規則

が十二分に体得されると、規則そのものが内面化され、フォーメーションにもとづく各人の役割も消滅する。時々刻々変化する状況に応じて一人のプレーヤーがなんらかの動きを起こすと、それを引き継いで他のプレーヤーが動きを開始し、次々と動きが継続されるようにチームが作動しつづける。そこには、作戦を運用する段階を越えて、意図的なフォーメーションの切り換えなどはない。武道の極意として説かれる「型から入って型を出す。そして型を出すことすらこだわらない」段階に近い。これがオートポイエーシスの段階だという。

自然な動きの流れが、観客席からみると、見事なフォーメーションの展開になっている。あたかもあらかじめ定めたフォーメーションを次々と繰り出しているかのようなのである。だが、観客席から眺めるのと、実際にプレーに参加してゲームの渦に巻き込まれる体験をするのとではまるで様子が違う。オートポイエーシスはこの動きつづけているプレーそのものを内から把握しようとする。

ただし、家族ルールをオートポイエーシスの視点からみると、家族員間の相互作用がその根底にあるルールに従うというよりは、その相互作用を通じてそのつどルールが産出される、というような言い方ができる。しかし、その誤解を河本氏⁷⁾は次のように指摘している。

この場合システムの根底にあるように思い描かれた規則は、明らかに観察者から設定されたものである。規則そのものは観察者の位置から設定しておき、それをそのまま行為者の視点へ移行させるとき、規則そのものをそのつど産出しているというような言明が生まれる。これは規則そのものの意味を変更しないまま、視点だけを移行させたために生じた奇妙な言明である。オートポイエーシスは、システムの作動の根底にある規則という発想そのものを換えようとしている。

このオートポイエーシスの視点は、家族ルールをシステム論の立場から捉えようとするときに、しっかりと頭に入れておくべき重要な事柄であるように思われる。

Ⅱ．家族システムの境界とオートポイエーシス

家族ルールに対する上記のオートポイエーシスの関係は、家族システムのもう一つの基礎概念である「境界」についても妥当する。なぜなら、オートポイエーシス・システムは、作動のコードをみずから作動しながら獲得してだけでなく、構成素の継続的な産出的作動を通じて意図せず自己の境界をみずから設定するからである。ただし、オートポイエーシスから眺めた境界の概念は、従来の家族療法の概念とは随分違った様相を呈する。上述の観客席からゲームのフォーメーションをみると、グラウンド内でゲームに参加して感じるのとの違いである。

家族システムの境界 家族構造とともに「境界」を家族ダイナミックスの中心概念として家族療法に導入したのは、構造派の創始者として著名なミニューチン¹⁴⁾である。彼によれば、境界とは、家族の構造化、つまり夫婦、親子、同胞等のサブシステムを区切るための抽象的概念であって、家族の相互作用のプロセスで、誰と誰とがどんな仕方でも交渉をもち、どんなふうにそれに参加するかを規定する隠されたルールによって設定される。ヘイリー¹⁵⁾は、情報の共有と隠匿から境界が生じると考える。夫婦間の会話の内容を子どもに伝えなかったり、逆に子どもどうしの話を親に内緒にすると、両世代の間に境界が生じる。境界によって、家族員の誰がサブシステムの内側にあり、誰が外側にあるかが決まる。境界の中でとくに問題にされるのが、世代間境界と性別境界である。たとえば、夫婦連合が欠落して一方の親が子どもを取り込んでしまうと、世代間境界があいまいになる。境界の性質として、明確かあいまいか、硬いか柔らかいか、開放的か閉鎖的かが区別される。むろん、それは「時とともに変化し、状況によっても変わる。」境界が明瞭で柔軟な場合、その時々状況に応じてサブシステムが形成され、またサブシステム間の連合も可能である。だが、境界があいまいであったり（纏綿状態）、硬直している（遊離状態）場合には、家族に問題が発生しやすい、といわれる。ミニューチンは、境界を空間的アナロジーで把握し、その明確度を実線、破線、点線で表現している。この境界線は、家族システムを外から、つまり観察者の位置から捉えたものである。しかもイメージとしては、ニュートン・パラダイムに規定されている。

亀口憲治氏^{16), 17), 18)}は、ミニューチンの境界線の概念の治療的重要性をみとめながらも、あまりにもスタティックで物理的ニュアンスが強く、生命過程としての家族の相互作用や家族システムの構造や機能の特性を記述するには必ずしも適切ではないと批判し、家族システムをひとつの生命現象として捉えるために、より生物学的あるいは生命的なニュアンスにとむ「境界膜」という概念を提唱している。境界膜は、きわめて複雑な多数のチャンネルをとおして同時的・双方向的に展開する力動的な過程であって、それをはさんで対峙する二者を隔絶するのみならず、その間の相互作用や相互浸透を前提としている。

オートポイエーシスの境界設定 このことについてはいろいろの言い方がある。「オートポイエーシスは境界をみずから作り出すことによって、そのつど自己を制作する」、「自己（オート）制作（ポイエーシス）とは、この境界の産出にかかわっている」、「システムはみずからの作動によってシステムの内部と外部を区分する」、したがって、「システムの作動に先立っては内部も外部も存在しない」、「構成素の産出はシステムにとっての境界の導入である」⁷⁾等などである。これらを一言で「境界の自己決定性」という。

イメージの産出を構成素とするシステムを心的システムというが、連想の場合、イメージネーションによって、連続的にイメージがイメージを産み出す。心的システムでは、次から次へと意識に浮かんで消え、消えては浮かぶイメージによって、意図せずにシステムの内・外の区別、つまり境界が設定される。現実構成主義によれば、このシステムの自律性によって、みずからが順応しなけ

ればならない「現実」をみずから創造する。したがって、産出プロセスによって構成される現実
は一人ひとり異なる。しかし、心的システムの産出プロセスは社会システムの構成素であるコミュ
ニケーションとの相互浸透によって影響されから、それぞれの「現実」は他者とのコミュニケー
ションを通じてある程度相互に共有し合え、了解し合うことができる。コミュニケーションに何ら
かの障害があると、異常な「現実」が構成される場合がある。奥村真紀子氏¹⁹⁾は、精神的に健康な
「現実」のことを他者と共有できる「現実」であると規定し、その構成にとって人生早期における
身近な人とのコミュニケーションの重要性を指摘している。

家族システムにおいては、ある特定の成員間に緊密なコミュニケーションが産出される場合、当
人どうしでは何も境界を導入しようとする意図はなくても、それを外部から観察すると他の成員と
の間におのずから境界が認識される。コミュニケーションの反復的産出によって、外部からみたとき
の「境界」が区切られるのである。むしろ、コミュニケーションが停止されれば、境界は消滅す
る。したがって、家族システムをオートポイエーシスとみなした場合、家族の境界は、システムの
作動、すなわち、家族内の相互コミュニケーション以前にあらかじめ存在しているものではない。
それは、家族員間の相互作用を通じてそのつど制作されるものなのである。

また、オートポイエーシスは産出的作動を基本とする「機能的システム」であるから、その境界
は、機能的に設定される位相空間に区切られ、空間内に表象することはできない。システムの境界
は細胞膜や体の表皮のような空間的境界ではないのである。これらは構成素の産出プロセスを通じ
て構築されたシステムの構造の境界ではあっても、機能的に規定されるシステムそのものの境界で
はない。それゆえ、ミニューチンの境界線の図像化は空間的に固定化され過ぎており、比喩として
もオートポイエーシスにはなじまない。オートポイエーシスにおける「境界の自己決定性」は、家
族システムの境界論に新たな視点を導入するはずである。

Ⅲ. オートポイエーシスの時間論と家族プロセス

オートポイエーシスの時間 これまで述べてきた家族構造やルール、境界は、オートポイエ
ティックな作動によって、たえず産出され、消滅し、変化する。オートポイエーシスとは、継続的
な産出プロセスのネットワークのことであった。プロセスを基本にするということは、家族システ
ムの中に時間の要素が入っているということである。プロセスにはつねに状況（構造）の変化と時
間の経過を伴う。

オートポイエーシス・システムは、みずからの産出的作動の継続を通じて自己の存在する空間的
位相領域を決定するとともに、さらに自己が自己に再帰的に関与する高次の自己言及的作動によ
って時間を獲得する。換言すると、産出関係によって構成素が張り出す空間を「位相空間」といい、
そこに経過する時間がオートポイエーシス的時間なのである。これらの時間と空間は、時計やもの

さしで測られるようなものではない。構成素が産出されている時が“今”といってもよい。オートポイエーシス・システムは、作動を通じてみずからの内に次々に“今”を生み出し、構造構築の一局面としてその時間軸上に自己の歴史を形成していく。作動が停止すれば、システムやその構成素が存在しなくなるばかりでなく、空間や時間そのものも消失してしまう。これは、古典力学のニュートン・パラダイムで定式化されるような空間・時間の概念とはまったく存在様式を異にしている。

この時間の考え方は、業縁と機縁を重視する仏教的時間論ときわめて類似している。仏教の時間論からすると、時間は、人の業（カルマ＝行為）によって切り取られ、いわばその切り口のところに“現在”がある。「その人の業は、ここで熟して、ここに“現在”がある」というような言い方を。したがって、業によってそれぞれの人にそれぞれの現在があり、その現在においてのみ、その人の時がある。つまり、人が生きて行為している時が“今”であり、コミュニケーションでいえば、その産出的作動の継続が“今”を作る。仏教では、あくまでも現在が中心になっていて、そこから過去と未来を見るのである。仏教的時間論については、三枝・岸田氏²⁰⁾の『仏教と精神分析』を参照のこと。

システムの構造転換 オートポイエーシス・システムは、作動しながら、産出した構成素をもとにみずからの構造を構築するとともに、その構成素の変数を変換することによって自己の構造を全面的に組み換えることができる。昆虫の変態がそのよい例である。オートポイエーシスにおいては、作動を反復することとシステムが劇的に構造を転換することとは無理なく両立するのである。この劇的なシステムの構造転換は、第二世代システム論では「相転移」として取り扱われており、家族療法ではワツラウィックらのいう第二種変化に相当する。

ただし、すべての出来事と変化は時間の経過と深く結び付いており、時間のない変化はあり得ない。オートポイエーシスにおいても、システムの反復的作動と構造の劇的転換には時間の経過を伴う。それゆえ、家族ルールや境界の形成とその変化には、業縁と機縁（時と条件）の成熟が必要であり、それはそれぞれの家族によって違う。いや、時間が違うとか同じだという言い方はちょっと違う。なぜなら、それは観察者の立場から比較した結果の謂であるからである。ただ、家族システムの作動にはその家族に固有な時間があるということは言えるであろう。

家族療法の時間 ワツラウィックらは、『人間コミュニケーションの語用論』の中で、本質的にオートポイエーシス理論と同じことを述べている。「システムに絶対的なものは、時間の間隔である。まさに本質的に、システムは相互作用から成り立っている。そしてこのことは、我々が何らかのシステムの状態や何らかの状態の変化を記述し得る以前に、作用や反作用の連続するプロセスが生起していなければならない事を意味している。」²¹⁾

家族システムの時間の経過にも普遍性と独自性があり、どの家族システムも自分自身が生み出し

た時間的枠組みに従って作動している。家族によって、構造やルールの変化に要する時間が異なっており、なかには、時間が止まってしまったように見える家族もある。ゲルサーらの『初歩からの家族療法』²²⁾にそのような例が記載されている。

親と十代の子どもが、まだ赤ん坊だったときのパターンと同じようなパターンで関わり続けている場合がある。しかも、両者とも家族外の人々とはもっと大人のつきあいをしている。そのような家族のある部分は、まるで時間が止まったかのようである。・・・家族の相互作用のある面では成長が認められても、他の面では時間が停止したようになり、そこから混乱や葛藤が生じてきている。

ミラノ派家族療法家たちは、家族システムに時間経過の固有の特徴があること、各家族が固有の進化の時計を有しているだけでなく、与えられた処方について考えたり、練習したりする際にも、異なった時間的スパンを用いるかもしれないこと、また家族が変化するための決定的な要因が時間にあることに気づき、次の結論に達した。すなわち、「あるシステムに逆説的介入のような、予期せざる、また動揺を与えるコミュニケーションを導入するためには、そのシステムに特有の時間的スパンを必要とする。それが確保されれば、個々の構成要素の行為や反応が基礎となって、システムの新たな動き方がまとまるようになる。」²²⁾

このように家族によってシステムの時間が異なるのであれば、面接時間や面接間隔はあまり固定化しないほうがよいかもしれない。間隔が短かすぎると家族は変化の機縁が得られず、長すぎると処方／肯定的意味づけの効果が減退するにちがいない。柔軟で可塑性に富むシステムにくらべて、現状維持的で硬直したシステムほど変化しにくく、変化に要する時間が長くなる²²⁾。ミラノ派のパラソラーリは、この点を配慮して、約1カ月の間隔をおいて10回程度の面接を行なった。これは「長期の短期療法」と呼ばれている。

カイロスと自己創出的応答 人との関わりにおいて、機が熟した時を問題にすると、そこに、カイロスの概念が出てくる。カイロスとは、クロノスが万人共通に所有される数量化可能な自然の形相的時間であるのに対して、一人ひとりが独自にもつ人間的な質的時間のことである。クライシス(危機)という言葉はこのギリシャ語に由来するといわれている²³⁾。それゆえ、カイロスは、「危機の時」であり、心理的危機を迎えても、やがて機が熟し、転機が訪れる決定的な転換の時であるといえる。カイロスは、これまで論じてきたオートポイエーシスの時間論と密接に関連する概念であるように思われる。

言うまでもなく、オートポイエーシスの時間論からすると、時間に関するコミュニケーションを産出することと、自己言及的作動によって時間を獲得することとは、まったく別の事柄である。とはいえ、筆者の前論文^{4),5)}との関連からすると、B-F質問に対する来談家族の返答に適切に自己

創出的な B - F 応答を繰り返すことによって、“今”という時の流れがしだいに成熟し、やがてシステムの構造転換をもたらす決定的なカイロスが生み出されると期待される。

自己創出的応答によって、コミュニケーションの小規則や新しい変化に対応しながら、それらを家族に気づかせ、さらにその変化をふくらませるような応答をつづけていると、やがて機縁が熟し、家族に大きな劇的变化が起こることをわれわれはいくつかのケースで経験している。それは、小さな肯定的変化の積み重ねが極限に達して、家族の交流パターンに第二種変化が生じたためである、と考えられる。このようなシステムの構造転換は、第二世代のシステム論であれば、正のフィードバックによって説明されるのであろうが、オートポイエーシスのシステム論においては、コミュニケーション過程への新しい意味の導入にもとづく相互のコンテクスト変換による自然な構造構築の一種に過ぎない。コミュニケーションが生きているということは、継続と転換の 때가 自然に両立しているということである。それゆえ、自己創出的応答は継続と転換という二つの契機を同時に合わせ持つものでなければならないであろう。オートポイエーシスの治療法とは、家族システムの自律的な作動様式（モード）の反復と構造転換に治療を委ねることである、といえるかもしれない。

参考・引用文献

- 1) 中村桂子 自己創出する生命：普遍と個の物語 哲学書房 1993.
- 2) 梶野 啓 複雑系とオートポイエーシスにみる文学構想力：一般様式理論 海鳴社 1997.
- 3) 十島雍蔵 家族システム援助論(5)：システム論的自我としての空我 鹿児島大学文科報告 1996, 32, 1-22.
- 4) 十島雍蔵 第三世代システム論と自己創出的応答 家族心理学研究 1997, 11(1), 43-56.
- 5) 十島雍蔵 家族システム援助論(8)：W型コミュニケーション・パターンにおける第三位置の応答について 鹿児島大学教育学部研究紀要 1998, 49, 141-157.
- 6) 河本英夫 オートポイエーシス：第三世代システム 青土社 1995.
- 7) 河本英夫 オートポイエーシスにもとづく研究評価論 科学技術庁(科学技術政策研究所研究評価論講演シリーズ) 1996.
- 8) 鈴木浩二 家族救助信号：家族システム論と家族療法 朝日出版社 1983.
- 9) Jackson, D.D. Family rule: the marital quid pro quo. *Archives of General Psychiatry*. 1965, 12, 589-594.
- 10) アメリカ夫婦家族療法学会編著 日本家族心理学会訳編 家族療法事典 星和書房 1986.
- 11) 佐藤悦子 家族内コミュニケーション 勁草書房 1986.
- 12) 平泉悦郎 家族療法 朝日文庫 1994.
- 13) マトゥラーナ, H.R. & ヴァレラ, F.J. 著 河本英夫訳 オートポイエーシス：生命システムとはなにか 国文社 1991.
- 14) ミニューチン, S. 著 山根常男監訳 家族と家族療法 誠信書房 1984.
- 15) ヘイリー, J. 著 佐藤悦子訳 家族療法：問題解決の戦略と実際 川島書店 1985.
- 16) 亀口憲治 「家族境界膜」の概念とその臨床的応用 家族療法研究 1991, 8(1), 20-29.
- 17) 亀口憲治 家族システム心理学：＜境界膜＞の視点から家族を理解する 北大路書房 1992.
- 18) 亀口憲治 現代家族への臨床的接近：家族療法に新しい地平をひらく ミネルヴァ書房 1997.
- 19) 奥村真紀子 Cybernetics への夢 科学哲学 1996, 29, 95-105.
- 20) 三枝充恵・岸田 秀 仏教と精神分析 小学館 1982.
- 21) Watzlawick, P., Bavelas, J. B., & Jackson, D. 著 山本和郎監訳・尾川丈一訳 人間コミュニケーション

- の語用論：相互作用パターン，病理とパラドックスの研究 二瓶社 1998.
- 22) ゲルサー，E., マッケイブ，A., & スミス＝レズニック，C. 著 亀口憲治監訳 初歩からの家族療法：ミ
ラノ派家族療法の実践ガイド 誠信書房 1995.
- 23) 斎藤友紀雄編集 危機カウンセリング 現代のエスプリ 第351号 至文堂 1996.